

# 誰かの力になりたい



# すがすがしい 少年たち

「少年の助けにすがすがしさ」

新聞の読者投稿欄の、こんな見出しが目飛び込んできました。

——先日、小学校の納涼イベントで、駐輪場の整理をしていたときのことです。突然のガシャーンという音に振り向くと、列の向こうで自転車が次々と倒れていくではありませんか。あわてて、他の係の人が直そうとしても、重みに負けて次々と倒れてしまいます。

そのとき現れたのは、通りがかりの中学生らしき男の子四、五人でした。彼ら



はひと言も言わずに、倒れた自転車を一つ一つ起こしてくれたのです。私が駆けつけたときには、ほとんど元通りになっていたほどで、本当に助かりました。

私たちは口々に「ありがとう」とお礼を言いましたが、彼らはやはりニコリとせず、何事もなかったように去つてい

きました。厳しい炎天下での作業でしたが、とてもすがすがしい気持ちになりました——

(大阪府豊中市・38歳・主婦、『産経新聞』平成十三年八月二日付)

新聞やテレビなどでは、毎日のように青少年犯罪や非行が取り上げられています。それも十六歳、十七歳の犯行といっ



たニュースほど、大々的に紹介される傾向にあります。

そんな中、ここに紹介された中学生たちには好感が持てます。ひと言も言わず、お礼を言われてもニコリともしなかつたことくらい、大目に見たいと思つてしまいます。

## 「若者に脱帽」

本誌『ニューモラル』の読者Nさんからは、次のようなおたよりが届きました。

—— 信号待ちで、若い人の運転する車の後ろに停車しました。その車からは、傍若無人といった感じで音楽が流れてい

ました。

ふと横断歩道に目をやると、青信号が点滅てんめつしているところを、電動三輪車に乗った年配の女性が渡りかけていました。そのとき、前の車から二人の青年が飛び出し、発進しようとする車の列に両手を大きく広げて制止すると、女性の安全を確認かくにんするように見守りました。電動三輪車は、赤信号になった横断歩道を悠然ゆうぜんと渡り切りました。

若者たちは待つまちていた車に頭を下げ、一礼いちれいすると、小走りに車に戻り、走り去って行きました。とつさの機敏きびんな行動で、さりげない親切を演えんじてくれた若者たちに胸むねが熱あつくなりました——

(東京都杉並区・70歳・男性、『ニューモラル』三八六号「あなたからのおたより」から)



ken

女性の安全を守った彼らの行いは、Nさんに感動を与えました。Nさんを感じさせたのは、若者たちの機敏な動きとみごとな行いでした。そして、一見して「傍若無人な若者」と感じた彼らに、優しさや勇気を発見したという意外性でした。

今日、若者をめぐる情報の中で、非行の低年齢化や青少年の凶悪犯罪の増加など、マイナス情報が多くなっています。もちろん、それらは大きな社会問題であることは事実です。

しかし、そうしたマイナス情報があまりにも私たちの身の回りにあふれているため、おとな大人世代は若者のすべてが問題であるかのような偏見を、へんけん知らず知らずのうちには持ちやすいのではないのでしょうか。



# 一人ひとりの「顔」が大切

マスコミの情報だけでなく、例えば、電車内や街中で一部の若者の傍若無人なふるまいにであつたりすると、私たちは若者全体に嫌悪感を抱いてしまうことがあります。

逆に、全体のイメージには内心まゆをひそめていたけれど、個々人はイメージと違つて別の顔を持つていたことに気づくという場合もあります。

「明石市の歩道橋事故（平成十三年七月二十一日、明石市における花火見物での事故）で現場にいた「茶髪の若者たち」

は、その例かもしれない」という記事が新聞のコラムに掲載されました。

——彼ら（茶髪の若者たち）が花火客に暴行を働き被害を広げたと、当初、一部で報道された。警備の機動隊員に体当たりした、という情報もあつた。だが、警察が調べたところ、そうした事実は見づからなかつた。

それどころか、「仲間と協力して、歩道橋の屋根に子供たちを引き上げ、新鮮な空気を吸わせていた」「屋根の上で携帯電話を使つて大声で一一〇番通報をしていた」といった目撃情報が幾つも寄せられている。

大局観に乏しいことを指して、「木を見て森を見ず」というが、森を見ようとするあまり、一本一本の木が持っている顔

をつい見逃してはいないか。省みて、少し考えさせられた——

（『読売新聞』平成十三年八月九日付より）

人間は他者を助けたり、手伝ったり、他者や社会の役に立ちたいという優しさや温かき、気高きを持っています。

ところが、「茶髪だから」とか、「今の若い者たちは」というイメージにとらわれて、一人ひとりの持つ優しさや温かき、勇気を見つめようとしないう心が知らず知らずのうちに働いてしまうことがあります。

また、彼らの優しさや温かき、気高きなどの「価値のあるもの」が、「若いから」とか、「未熟だから」ということで、貧弱で、役に立たないかのように見てし



まうことがあるのではないのでしょうか。私たちが暮らしている情報社会には、このような「落とし穴」があります。



困こまっている人がいたら、手を貸かしてあげたい、助けてあげたいという気持ち  
は、今の若い人たちの心にも十分にあり  
ます。また、やり方が分かれれば、受けた  
恩おんをお返ししたいという心情しんじょうも十分に  
持っています。大人世代は、若者の持つ  
ている「美しい心」を、もつと認みとめ、信しん

頼たのじていくことが大切でしょう。

平成九年一月、島根県沖おきの日本海でロ  
シア船籍せんせきのタンカー「ナホトカ号」が沈ちん  
没事故を起たこし大量たいりょうの重油じゅうゆが流出しまし  
た。それが原因で日本海沿岸が広範囲こうはんいに  
わたって重油被害を受けました。

作家の童門冬二氏どうもんふゆじは、このときに海岸  
清掃せいそうのボランティア活動をした高校生グ  
ループの姿を見て、「若い人も「美しい  
心」を十分に持っているという確信かくしんが持  
てた」と、次のように述べています。

——福井県三国町みくにまちの海岸一帯に重油が  
漂着し、鳥は油だらけになるなど、いろ  
いろな被害がありました。ちょうど冬場ふゆば  
のことで、吹雪ふぶきが吹きすさぶ中を地元じもとの  
人たちが重油被害の後片付けあとかたづけをするのに  
大変な苦勞をいたしました。



あるテレビ局が、重油で汚れた海岸で清掃作業をしている人たちを取材し放映しました。その中で、高校生のグループがインタビューに答えて、次のように話していました。

「君たち、福井県の高校生ではないですね。どこから来たの？」

「僕たちは神戸から来ました」

「どうして神戸の人がここに来ているの？」

「阪神・淡路大震災のときに、僕たちは日本中の方々からいろいろなご協力をいただきました。あのときの恩は忘れません。復興が早かったのも、やはり日本中の方々のおかげだと思って感謝しています。そのままにたくありません。だから、日本のどこかで不幸なことが起こつ



たら、お金と時間がある限り、僕たちはそこへかけつけようじゃないか、そしてお手伝いをさせてもらおうということ

で、ここに来たのです」

これが、「美しい心を若者が立派に持っている」という意味です——

童門氏は若い人たちに向かって、次のように呼びかけています。

重油流出事故のとき、多くの人が福井へ来てくれたのも、もともとは阪神・淡路大震災において「美しい心」の発露があったからなのです。だから、時空を超えて距離には関係なく、お互いに助け合おうという気持ちがあつたのです。

若い人の中には、多少道を踏み外した人もいますが、大半は真面目で誠実な心を持つている人たちです。

「美しい心」なんてものは昔の話だというような受けとめ方ではなく、若い人

自身がその「美しい心」を持っているの

だから、自信を持って、その心をもっともっと大きく広げていってほしい、と。

(童門冬二著『生涯学習ブックレット』日本人の美しい心』モラロジー研究所刊)





財団法人モラロジ―研究所では読売新聞社と共催で、平成十二年十一月から平成十三年一月にかけて、「二十一世紀の地球人のモラルを考える」提言を募集しました。そして、文部科学大臣奨励賞などの表彰を行いました。

そのうち、十六歳の枝松鈴子さん（岡

山市・審査会特別賞）は、「二十一世紀のモラル——誰かの力になりたい」と題して提言し、未来社会に対する夢を語っています。

——二十一世紀がやってきた。これから私たちは、何を考え、どう生きていくべきなのだろうか。（中略）

ボランテニアの活動は、二十一世紀という時代にふさわしいものであると思う。ボランテニアとは、何か人の力になりたい、という気持ちから、自主的かつ自発的に、無償で行動することだ。その「人の力になりたい」という気持ちこそは、二十一世紀の地球人の心のあり方であると思う。（中略）

二十一世紀。誰かの力になりたい。地球人として、すべての人と共存していき



たい。その気持ちを持って、誰もが自分自身の生き方を考えていけるような世界が、そこにあればいいと思う――

応募作品の選考委員の一人である木村治美氏（共立女子大学教授・エッセイスト）は、作品を読んで感じたことを、産経新聞（平成十三年六月十三日付「正論」）で、次のように述べています。

――日本人ほど個人と集団を調和させることに優れている国民はいない。それなのに、いつしか個人性のみが突出するようになってしまった。（中略）

キレル人が多くなつた。それとともに、事件が起こつても、見て見ぬふりをする人が多くなつた。……どちらも自分以外の他者とかかわるのが苦手であり、

抵抗感があるようだ。……個人の価値を尊重するあまり、集団とかかわらないことにかつこよさを見出し始めているのかもしれない。

喜ばしいことに、最近、ついに新しい方向が見えてきたことを指摘したい。モロロジー研究所が「二十一世紀の地球人のモラルを考える」というテーマで提言を募集した。入選した二十二編を読ませてもらったが、人間の生き方を追求するモラルを考えるにあたって、みずからの自己実現だけに終わる作品は一つもなかった。

……十六歳の女子高生は、ずばり「誰かの力になりたい」と書いていた。他人のために生きること、自分がなくなるわけではない。他人を輝かせることで、

自分も輝く。そういう時代が見えてきた


木村氏は、二十世紀は「自分のために生きる」「自分が輝く」ことに強調点が置かれた時代であったが、この提言募集で入選した作品には、二十一世紀は「他者



のために生きたい」「他者が輝ければ自分も輝く。私が幸せになれば他者も幸せになる」という他者への視点がはつきりと打ち出されている、といます。

そして、「二十世紀とは違うモラル、それは「他者を輝かすことで、自分も輝く」ということである」と強調しています。





# 対する責任

「誰かの役に立ちたい」

「困っている人がいたら手を貸し

てあげたい、助けてあげたい」という気

持ちは、「他者とかわかって生きたい」という

願いの表れです。

大人世代は、家庭で、学校で、地域社会の場などで、

若い人たちの「あら探し」をするのではなくて、彼らが

さり気なく発揮する温かさや、優しさを発見していくこと

に関心を払っていききたいものです。そして発見したときには、

精いっぱいほめてやり、認めてやり、「ありがとう」と言っ

てあげようではありませんか。

彼らや彼女たちが持っている「誰かの力になりたい」という「美

しい心」をいっそう大きく、豊かに育てていくことが、大人世代の

役割でしょう。同時に、二十一世紀に対する責任であるといえるの

ではないでしょうか。

# 21世紀に

